

人間・植物関係における質的研究の意義と可能性

松本光太郎

名古屋大学エコトピア科学研究所 464-8603 名古屋市千種区不老町

Meaning and Potentiality of Qualitative Approach on the People-Plant Relationships Research

Kotaro MATSUMOTO

EcoTopia Science Institute, Nagoya University, Furo-cho, Chikusa-ku, Nagoya-city 464-8603, Japan

はじめに

名古屋大学のエコトピア科学研究所というところに勤めています松本と申します。よろしくお願ひいたします。

自己紹介は後ほど詳しくいたします。まずこの写真を見てください。今年の3月に、あるおばあさんと一緒に菜の花畑へ行った時に撮った写真です。私は高齢者と付き合いながら、高齢者がどういう環境に取り囲まれているか、どういう環境と出会っているか、そういったことをずっと研究してきました。その時に「環境」と呼んでいるのは、植物に限ってはいません。

彼女（＝写真の中のおばあさん）は元々、ある意味では園芸依存症と申しますか、家のアルバムの写真を見せていただくと、家が鉢植えに囲まれているような状態でした。今は特別養護老人ホームに入られていますので、なかなか自分で園芸をすることはできませんが、この時は菜の花がすごく綺麗だったので、一緒に菜の花の近くまで行って、そこでしばらく一緒にしゃべっていました。たぶん菜の花と一緒に見たのはこれで3回目…。3年続けて見たので、多分3回目だと思います。彼女はこの後の話では出て来ませんが、高齢者と植物と一緒に撮った写真があったなと思ってお見せしました。

自己紹介

それでは自己紹介をしたいと思ひます。私はこの学会員ではありませんので、どういう者かということをお話ししなければなりません。私はもともと九州大学の出身で、心理学の中の質的心理学と言われている分野、その中でも環境と高齢者をテーマとしてやってき

ました。そしてそういう研究をするなか、名古屋大学の方へ就職をしました。今、私が勤めているのはエコトピア科学研究所という、おそらく皆さん聞きなじみがない……ないはずの研究所です。というのは今年文科省に認可されたばかりの新しい研究所です。この研究所は、元々污水处理とか熱処理とか、原子力とかナノテクノロジーとか、そういう技術系のセンターをくっつけて出来た研究所で、技術系の研究者が約50名います。私が所属するのは、融合プロジェクト研究部門と申します。環境にまつわる文系の教員、具体的には政策学、経済学、国際協力学、そして私の心理学の教員が5名配置をされています。なぜこんな話をするのかと言うと、この学会は農学系の方が多いとお聞きしました。あと、作業療法士さんがいくらいらっしゃるとお聞きしました。この学会と私の勤め先とは、多数の理科系の方と少数の文科系の方がいらっしゃるという点で、構成が似ているのかなと思ひ、私の勤め先の紹介をしました。この学会で発表することが決まった後、この学会は農学の方が多いとお聞きしましたので、研究所にいる農学の先生にアドバイスを求めましたら、その先生から「農学をやる人は、自然は自分達の想像には及ばない、非常に壮大なものであることを知っている。そういったことを念頭に置きながら発表したらいいんじゃないか」とアドバイスをいただきました。そういうことを多少、頭に入れながら今日は発表したいと思ひます。

先ほど少しお話ししましたが、私の研究分野は、自分では環境老年学と呼んでいます。英語だと、*Environmental Gerontology*と言ひます。そのなかでも、高齢者と彼/彼女を取り巻く環境のありかた、そのことについて研究を行っています。具体的にやっていることは、以前やっていた研究ですと、在宅の高齢者と一緒に外出をして、外出時にどんな環境に取り囲まれていて、どんな環境に出会っていくのか、ということ同行する中で調査をします。同行というのは、本当に高齢者の方と一緒に歩くわけですね。彼/彼女が買い物に行ったり、病院へ行ったり、散歩に行ったり

2007年3月10日受付。

本稿は、2006年6月3日(土)に行われた本学会2007年大会公開シンポジウムの内容を、講演者の了解をとったうえで録音して書き起こし、本稿のみを閲覧しても内容が伝わるよう、講演者に加筆修正をお願いして作成したものである。なお、テキストの書き起こしは、岡山大学大学院・社会文化科学研究科・大学院生の福田茉莉、福島和俊が担当した。

する時に、私もついていくという調査を行いました。この研究は論文として掲載されましたけど、査読の段階で結構もめたと聞きました。方法論としてどうなのかとか、再現可能性があるのかとか、そういうこともめたようです。そういったコメントに応じて、こういった方法を採用した論文でも、あえて言えば科学的な論文としてちゃんと成立しているということで通していただいたと考えています。

次は、ある特別養護老人ホームに、週に1日、もしくは2日通って丸1日そこに居て、出会った入居者や職員や家族と付き合い続けるというフィールドワークを3年ほど行っていました。こちらはまだ論文を書き始めたばかりの状態です。一つだけ掲載の決まった論文では、施設という環境はどのような環境であるのかということ、そこで生活している人の行為や体験、そういうことを読み解きながら施設環境はどのような環境であるのか考えています。1回だけ施設に行くと、施設はあまり心地よい環境ではありませんから、何となく「施設環境、嫌な環境だなあ…」と判断してしまうのではなく、そこに居続けて、生活している人たちと付き合い続ける中で、生活する場として施設環境はどういうことが起こって、どういうことが起こらないのかということ、丁寧な書き出しをしていくことを行っています。これは現在進行形の研究です。

本題

ここまでが一応自己紹介です。ここは人間・植物関係学会ですので、今日お話しすることは、そういうこと（人と植物の関係）に関して、自分の研究の紹介を兼ねながら、どういうことを考えているかお話ししたいと思います。

まずさしあたって、人と植物の関係に関して、知ってらっしゃる方もいると思いますが、これはメキシコの画家フリーダ・カーロ（Frida Kahlo）の『ルーサー・バーバンクの肖像（Portrait of Luther Burbank）』という絵です。ルーサー・バーバンクという方は、もともと園芸家だそうです。園芸家の彼を、半分人間で半分樹木であると、人魚姫みたいなイメージだと思うんですけど、フリーダ・カーロがそのように描いています。下のほう（＝バーバンクの足元）が死者につながっているのがすごくメキシコらしいと思います。生と死の境が曖昧というか、両義的であることを表しているのだと思います。こんなふうにと植物は常に共存している、分割できるもの／切り離せるものではなくて、共存関係に常にいることをこの絵は表しているのではないのでしょうか。メキシコは本当に面白い国で、オアハカに「死者の祭り」という有名な祭りがあつたり、マヤやアステカといった遺跡がそこら辺にゴロっと転がっていることから、歴史を超越していると

言いますか、時空のなかを行ったり来たり常に行っているようなそんな感じがあります。メキシコにいますと不思議な感じになりますけど、この絵もフリーダ・カーロがうまく、人と植物、人と環境が相互に関連している、もしくは浸透していることを表しているのだと思います。

人と植物が切り離せないということは、この学会ではおそらく共通認識なのだと思います。皆さんおそらくそう思ってこの学会に入られてきたのだと思うのですが、先ほど長谷川先生がお話されたことと通じますが、研究行為として人と植物を切り離せない関係として本当に表すことができるか、そのような研究が現状できているかということはどうでしょう。少なくとも今回の発表の要旨（＝抄録集）を見せていただいた中では、人と植物を切り分けてその影響関係を云々するという研究が多いというのが私の感じたことです。これは外野からの意見ですけど、そういう感じを持ちました。

これは必ずしも小さな話ではなくて、人と人との関係も、人と植物との関係と同じように考えると理念としては「切り離せない」と思われるのではないかと想像するのですが、研究行為としては切り離して研究していることが本当に多いわけです。これは全然小さな話ではなくて、すごく大きな問題なんですけれども、現実にはそういうこと（切り離して研究をすること）になっているのだと思います。

今日はこの点について、「人と植物は切り離せない関係である」ということについても話していきたいと思つています。この「切り離せない関係」をどう表していくのかということ、またどう伝えていくのかということも考えてみたいと思つています。

具体的なエピソードの紹介：三つのエピソード

次に、私がフィールドワークにおいて出会ったエピソードを三つ紹介しながら、このシンポジウムのテーマである「質的」ということについて、具体的には人と植物の関係における「質」、もしくは「質感」を捉えるということを考えてみたいと思つています。

あとで具体的にエピソードを紹介させていただきますが、まずそれには何が記述されているのか考えてみます。私の場合は、特別養護老人ホームの入居者において、日常何気なく起こっている事柄を記述していきます。「何気なく」というのは、例えば、いま長谷川先生が指で目を触られましたけれど、1時間後に私が長谷川先生に「先ほど指で目を触られていましたね」と言つても、「はい」も「いいえ」もないように思つています。「そうだったかな?」「そうだったかもしれない…」「そうでないかもしれない…」、そういうふうにと、人は何気なく自覚なくいろいろなことをしながら生活をしているわけです。そのような「何気なくしてい

る」, そういうことを記述していこうとしています。

なぜ日常の何気ない行為を記述するのか。その理由ですが、人の生活にとっていちばん大事なことというのは日常当たり前に／何気なく起こっていることであつたり、体験したりすることではないかと考えているためです。例えば、あまり適切な例ではないかもしれませんが、高齢になってご夫婦で住まわれている方がいらっしゃって、ある時妻／連れ合いが亡くなられる。そうすると夫が「おい、お茶」と言う相手がいなくなる、もしくは「おい、お茶」と言うことができなくなってしまう。それ（言う相手がいなくなる／言うことができなくなる）がどれだけその人の生活を崩していくことになるか。そういった点から、人にとって一番大事なことというのは、意外と当たり前のこと、何気なく行っていること、そういうことだと私は考えています。ですので、日常の何気ない行為を記述しているわけです。

アプローチの方法としては、入居者が日常ある環境に出会っていく／入居者においてある行為が生まれていくその場に私が居合わせる中で記述をしていくというアプローチを採っています。

私が採っている「同行」という方法もそうですが、その場に居るということが方法の中ですごく大事でして、その場に当たり前に居て彼／彼女の行為を記述することをしています。そういう当たり前の存在であるためには時間の経過が不可欠です。一方で、たんに時間をかければいいというわけではなく、時間の経過が短くとも面白い研究はできると思います。このフィールドワークに関しては長い時間が経過していますが、何かが起こるとき、当たり前のことが当たり前に起こる場に居合わせるような関係性を作るのはすごく時間のかかることだと思います。

施設では、車椅子を押したり、掃除をしたり、移乗を手伝ったり、施設のスタッフほどハードではないですけど、常に関わりながらそこにいることを私は続けています。

エピソード1

今から三つのエピソードを紹介したいと思います。レジュメのほうをご覧ください。

まずは、一つのエピソードです。

平成15年2月のある日 天気：晴れ

昼食後、平戸さん（以下全て仮名）が座っていた前のテーブルにみかんが置いてあった。私が「食べないのですか」と平戸さんに声を掛けると、彼女は「（あなたが）食べなさい」と返してくる。私は横に座って、むいてあったみかんを手に取り、一袋取り分け彼女に差し出したが顔を背ける。「あまり好きではないのですか？」と彼女に尋ねると、「好きではない」と答

える。「体にいいから食べなさい」と彼女は私に言うので、一袋私が食べた後再び「体にいいから食べませんか」と勧めると彼女は再度顔を背ける。私は彼女に「平戸さん、自分でみかんは体にいいと言ったんですよ」と苦笑しながら話した。

このエピソードは植物とは関係ないです。まず平戸さんの人となりを少しお伝えして、紹介したいのは植物に関する次のエピソードです。

おやつ時間の後に、新しく届いていた花の雑誌の「桜Ⅲ」特集を見ながら、「この下で食べたらなんでも美味しかろう」と平戸さんは2度ほど言う。この発言が私にはなんとも印象的だった。もちろん私達の生活においても、あの写真のようなきれいな桜の下でご飯を食べる機会はそれほどないが、可能性がないわけではない。我々は可能性が開かれていることを暗黙に前提としている。私の実感としては、入居者の方はその可能性を感じるのが難しいように思われた。もちろん、身体状況の問題もあるが、施設に入所しているという環境的／規範的問題がある。そのなかで平戸さんが、「そういったところへ行くために体をよくせんと」と前向きな発言をされたことは少し驚きであったし、嬉しく感じた。

その後平戸さんは、「こちら辺に桜の木があると言ってたけど、どこにあるのか」と尋ねてきた。また、自分の経験と照らし合わせて、「（桜の）花は見とらんもんね。一杯やるのが楽しみたい」とお花見の話をしてくれた。

平戸さんは今もご健在で、87歳になったと思います。彼女は背がすごく小さな方で、体も華奢です。若い頃は芸者をされていたと何度か聞きました。結婚されていたのですが、連れ合いの方はもう亡くなられたそうです。養女さんがお一人いらっしゃいます。

彼女は元気があるというか威勢がいいというかそんなところがあります。ある時私が、腰が痛くて腰をさすっていたら、「自分（＝平戸さん）の部屋行って湿布を持って来い」と私に言うので、彼女の部屋へ行き、「何だろうなあ」と思いつつ湿布を持って来ると、そこから1枚湿布を取り出して私に「貼りなさい」と渡すわけです。そんなふうには気風がいいところもあれば、ちょっと言葉が強いというか、よく人に啖呵を切るところがありました。相手が男性でも女性でも、よく喧嘩をしている、そんな方です。耳が遠くて補聴器をしていて、それから半身に麻痺が残っています。麻痺があつて、段々体が弱くなっていることもあり、外へ出ることが最近では難しくなっています。最近では、ほとんど話さなくなっているのですが、何か唐突に話し出すことがあります。この前、半年ぐ

らい前だったと思いますが、私が横にいると唐突に、「眼鏡をかけん（かけない）方がよかよ」とニコニコしながら私に言うことがありました。あと、一緒にテレビを観ていたとき、ぼ〜っと見ているのかなあと思っていたら、突然「ああ、和田さんか〜」とテレビに向かって言うんです。和田さんって誰のことだろうと思って見たら、画面に和田アキ子さんが映っていて、「和田アキ子というよりも和田アキオ」といったようなことを平戸さんは話し始めたことがありました。

それから、彼女がまだよく話していた頃に聞いたのですが、一番好きな花はコスモスと言っていました。2度ほどコスモスを摘んで彼女に持っていったことがあるんですけど、今一つ反応が薄かったことを覚えています。

さて、このエピソードで大事だと思えるのは、一つは「木の下で」という表現です。「この下で食べたらなんでも美味しかろう」ということでした。環境、もしくは植物を、皆さんが園芸という形で扱う学問の場合、特に対象物、もしくはオブジェクトとして扱うように思います。ところが、一方で環境や植物の側面である「私たちを取り囲んでいる」という状況、そのことに関してはあまり扱えていないように思います。例えば今皆さんは、ここ（松本の立っている場所）を取り囲んでいます。一方で、長谷川先生の方を私が向くと、長谷川先生に対しているわけですから、長谷川先生は私にとってオブジェクトとなるわけです。私とオブジェクトとしての長谷川先生との関係は扱えますが、それ以外の取り囲んでいる方々のことに関しては、現状ほとんど扱えていないと言えるのではないかと思います。平戸さんが言った「木の下で」という表現はおそらく皆さん…、皆さんというのは失礼かもしれませんが、多くの研究者は扱えていない事象ではないかと私は考えています。

もう一つこのエピソードから言えるのは、おそらく普通の研究者はこういう描き方はしないと思います。彼／彼女は何かと言った、それはこういう意味じゃないか、という解釈をしていくのが多くの研究ではないかと思えます。私の場合は、この場で私がこう話したということも一つのエピソードですし、一つのそこで起こっていることだと考えています。そのような私の行為や体験を含めて事象ですので、むしろ自分が何を思ったか、楽しく感じたり不自由に思ったり怒りを感じたり、それ自体書き込むことが大切ではないかと思っています。「何々を言った」という言葉だけを切り取り扱うのではなく、むしろそこにおいて、彼女とあの場所で関わり続けている私が、彼女の発話を受けて何を思ったのかということを書いていくという点が多分違うところだろうと思います。

エピソード2

二つ目のエピソードはちょっと長いですけど、読んでいきたいと思っています。

平成16年4月のある日 天気：晴れ

昼食前、フロアに出てきていた中村さんに声をかけた。「今日は体調どうですか？」「外に少し出ませんか？」という私の声かけに、「出ようかね〜」と彼女は返答した。小久保さんの車椅子を押していた主任に一言断りを入れ、中村さんとエレベーターで下へ降りて行った。外へ出て、駐車場のある方へ行き、奥の方へ車椅子を押していった。すると、「増えている」と中村さんは話される。私は「何がですか？」と訊ねると、「鯉のぼりが増えている」と彼女は返す。私は実際鯉のぼりが先週から増えているのかどうか分からなかったため、「そうですか〜？増えていますかね〜」と曖昧な返答をした。ただ、目の前に立っているマンション（5階建てのワンフロア6戸ぐらい）に、五つの鯉のぼりが立っていたため、「鯉のぼりを飾っているところって結構あるんですね」と私は言葉にした。中村さんは、「そうやね〜。結構多いよね〜」と返してきた。

中村さんと散歩に出るのは、4回目ぐらいでした。この時は、3週続けて、周期的に散歩へ行っていたんです。ですから、鯉のぼりも“先週から増えている”と感じるわけです。先週も見たから今週増えているということが分かるわけです。こういったように周期的に散歩へ出ると、環境の変化を感じることが出来ます。初めて外へ出る、旅行などで初めての場所へ行くということも意味があると思います。一方、変化を感じることが出来るということ、それも大事だろうと思います。変化を感じることは、身体が持続している感じを得ることに繋がっていくのではないかと思います。つまり、内（室内）だけでなく、外における環境の変化を感じることで、自身の身体が持続している（施設内で留まることにより身体が孤立したり曖昧になるのではなく、他の存在と繋がりながら時間が経過してきている）感覚を得ることが出来るのではないかと思います。身体というものは施設内だけにとどまるのではなく、外にも関連付けられて成り立っているのではないのでしょうか。

次は、植物に関係するエピソードです。

さて、いつものように隣接する家の庭を眺めながら施設の門の方へ戻っていった。中村さんは移動しながら「あれは、ぼけの花かね〜」「あれは桜の木？たっくさんの木があつまるとる（木の本体がいくつかの木が集まったようにしている）」など話していた。いくつかの発見があったようだ。こういった気づくことが外で

は結構あるように思う。

逆側のサイドへ移動していった。奥の方へ進み、しばらくその場所にいる。そこでは視界に入ってくるマンションに飾ってあった鯉のぼりの話をしていた。「あそこにもありますよ」。

そうこうしている時に、私は遠くにつつじの山のよなものがあるのを見つけ、「中村さん、ちょっと動かしますね!」と言って車椅子を変則的につつじの見える方向へ動かした。中村さんは視力がいいため、すぐに気づくと「わ～!つつじが…」と声を上げられた。今日一番、声を上げられた瞬間だったように思う。声の質が少し変化した。上ずったと言っていいだろう。本当だったら、つつじの近くに行きたいところだが、何せ車椅子で行くには遠い場所にある。また、行くためには舗装されていない場所を通らねばならない。しかし、遠くから見るにしても、そのつつじの集まりの大きさに中村さんは十分に驚いていた。その驚いた姿に私も嬉しい気持ちになった。

しばらく、つつじの形状などの話をしていた。

そして逆側のサイドの方へ、つまり戻るために車椅子を動かし始めた。右手の金網の向こう側——そこにはマンションがあるのだが——マンションの中を子どもとそのお母さんが歩いてきた。すると、子どもがこちらに「バイバイ」と声をかけてきた。それに対して中村さんは「バイバイ」と返していた。私は子どもに返答はせず、中村さんに「かわいいですね」と声をかけた。

さらに進んで、施設正面右側にある門の前に車椅子を停めた。私は、先日聞いたが忘れてしまった木の名前を再び尋ねた。「中村さん。あの木の名前この前聞いたんですが、なんて名前でしたっけ?」。すると、「あれは、いぬまきの木」と答えた。あまり聞きなれない名前なので、中村さんの顔を覗き込みながら「いぬまきの木?」と再度尋ねる。中村さんは「イ・ヌ・マ・キの木」とゆっくり発声してくれた。「あの木は何か咲くんですか?」と私が訊ねると、「咲かん」と一言。そっけないというわけではないのだが、一言返答された。

私は木の名前をほとんど知りません(苦笑)。私には聞き慣れない名前でしたので、中村さんの顔を覗き込みながら「いぬまきの木?」と再度尋ねました。中村さんは「イ・ヌ・マ・キの木」といった感じでゆっくり返されました。「あの木は何か咲くんですか?」と私が尋ねると、「咲かん」と一言。素っ気ないというわけではないのですが、彼女そういうところがあるので(笑)。まあ、そんなふうには話していました。

二つ目のエピソードについて、これを読むとどうでしょうか。外へ出たときの体験の豊穡さが体感できるのではないかなと思います。植物も外へ出ると、こ

れだけいろんなものに出会うことができる、いろんなものに取り囲まれている、ということが読んで体感できるのではないかと思います。外へ出ると、ほけの花、桜の木、いぬまきの木、そしてつつじの大群など、二人は植物に出会い、かつ取り囲まれていると言えます。

中村さんはまだ60歳代後半の女性で、ちょっと病名は忘れてしまいましたが、腰が悪く、あと自立歩行が完全にできないという問題があって、3年ほど前から病院、そして施設に移るという形で自宅から離れている状況です。彼女はいつも外へ行きたいと言うわけではないのですが、外へ行くとすごくリラックスしている感じが伝わってきます。外へ出た時には、植物だけに出会うわけではないのですが、植物だけをピックアップしてもこれだけいろんなことが起きているということを感じてもらえるのではないのでしょうか。

エピソード3

それでは三つ目、最後のエピソードを紹介します。

平成16年8月のある日 天気:記述なし(「暑さ知らず」と記されている)

今日一番のエピソードは、渡瀬さんと青虫との出会いである。渡瀬さんと外へ行く前に、私は福島さんと外へ出てきていた。その時、職員の高木さんがサービスステーション前にいた人(陣内さん、小久保さん、三島さん、新開さん)を連れてきた。彼女らと外にいる時に、みかんの鉢に青虫がいるのを高木さんが発見した。彼女らは青虫を見ても別段驚きもしなかった。

そして、渡瀬さんと外へ出た時である。私は「面白いものがあるんですよ」と言って、その鉢に近づいた。渡瀬さんは自分でよく言うようにいつも「ポ～ッ」としているが、その時も鉢の前にいて私が青虫を指差しても、そちらに焦点が合っていなかった。みかんの茎と同じ色だったので、見にくかったのかもしれない。ともかく少し目を動かして、ある瞬間焦点が“カチッ!”と定まると、渡瀬さんは体を“ビクッ!”とさせた。その驚きたるや尋常ではなかった。彼女の顔は一瞬引きつり、私が「渡瀬さん、青虫嫌いなんですか!?’とあわてて訊ねると、「嫌い。とても嫌い」と困った顔をして訴えた。私は直ちにそこから車椅子を離れた。離しながら「申し訳なかった」と伝えた。渡瀬さんには驚いた余韻が残っていたが、怒ったりはしていなかった。

場所を離れてしばらく青虫をネタにして話していた。私が「渡瀬さんの弱点を知りましたね～。もちろん、何もしませんよ」と笑って言うと、「何かしたら犯人はすぐに分かるたい」と隣にいる私を指差して笑っていた。こういった機知に富む応答が渡瀬さんらしい。

〔中略〕

最後に、渡瀬さん語録である。「新鮮な空気をだいぶ吸ったね」というのも渡瀬さんらしいが、次に以下のことを一気に話された。

「上にいると、暑いのも、寒いのも、風がふいとうのも分らん。少々寒くても寒さを感じんし…。ご飯も食べさせてくれるし、姑さんの心配はせんでいいし、ここは本当に幸せじゃ…」

この言葉の真意は簡単には分からないが、渡瀬さんらしい言い方のように感じた。

渡瀬さんは、現在78歳だったと思います。彼女がなぜ施設に入居しているかという、若い頃にお酒を飲みすぎて糖尿なんです。結構太っていらっやいます。

渡瀬さんとは、2年半ぐらい付き合っていますが、未だに私の名前を覚えてもらえたことはありません。でも、なぜか私の息子の名前は覚えています。そこは私もよく分からないところです。

さて、このエピソードでは、視線がボンヤリとしていたなかで、青虫にカチッ！と視線が合う瞬間があって、その時渡瀬さんは体をピクッ！とされて、その尋常ではない驚きを描いています。

そして、青虫がいた場所を離れて、怖かったにもかかわらず二人で青虫の話はずっとしていました。私が「渡瀬さんの弱点を知りましたね」とおどけると、彼女は「何かしたら、誰がしたかすぐ分かんたい」と私を指差すところなどは、機知に富み、すごくさわやかに返されて、そこが彼女の素敵なおところなんです。

この時の青虫のエピソードは、今でも二人で話します。外へ出ると、「青虫がおらんかねえ？」と言いなながら彼女は周りを見ます。そういったようにいつも気にしていると思うと、何かすごく神経質だなあと思う方はこの会場にいらっやいますか。もしくは、そういう嫌な体験をさせてかわいそうだなあと思う方はいらっやいますか。

彼女が「青虫はおらんかねえ？」と毎週毎週言われるので、私はある時「ひょっとして渡瀬さん、青虫好きなの？」と聞いてみたことがあります。そうしたら、「好きではない」と彼女は返しました。そして次の瞬間、「ただ、怖いもの見たさたい」と笑っていました。

青虫に出会った時の体験は、必ずしもネガティブなこととしてずっと引きずっていくのではなく、それはそれとして私との会話の中における一つの「歴史」——というのは大げさかもしれませんが——ということとして二人の間で実っていくという感じがあったように思います。

この後には、ヒルの話をしていました。「田んぼの中で血を吸われてあざがついて」という話をしました。

青虫の体験は、そういうふうには話が広がっていくきっかけでもありました。

エピソードの考察

当たり前に起こっていること

以上、三つのエピソードを紹介してきました。次に、エピソードのまとめという形で少し話していきたいと思います。

いま紹介したエピソードから読み取れる、人と植物との間に生まれた関係／質感というのはどういったものでしょうか。ここで生まれた関係性というのは、以下のような行為が実現して体験が生成していることではないかなと思っています。

手を伸ばす。驚く。目を凝らす。触る。笑う。においを嗅ぐ。車椅子を側溝ぎりぎりまで寄せる。「きれいだねえ」と感嘆する。感心をする。探す。気づく。

これらは実際に生まれた行為や体験の一部だと思えますけれども、何か「ああこういうことが起こってるなあ」と思うわけです。施設内では分からないけれども、外へ出て植物とかかわることによって「こういうことが起こってるなあ」と思うわけです。これらの行為や体験というのは、このような言葉で表すしかないわけですが、この言葉から現れる、みなさんが感じ取れる、そういった質感が生まれれば、伝わればいいなあと思いながら記述をしていきます。「伝わる」ということは、字面ではなく、言葉を通してそこから何か感じられるもの、何か想像できるもの、そういうことであると思います。少なくとも私はそう思っています。

エピソードからこういった行為や体験を感じ取ることができたら、外へ出ることで人と植物の関係にいろいろと起きているということがおもしろいと思える、そのことは本当に大きなことではないかなと思います。誰かと誰かが出会って何かが起こる、これは心理学では相互作用と言います。人と人との対人関係、もしくは相互作用に注目する勢力は今比較的強いのですが、人と人との相互作用のような「強い関わり」だけではなくて、私たちが生活するなかで当たり前に起こっている植物との関係も含めた「淡い関わり」や「行為や体験」、あと「環境体験」、そういったあり方もあるだろうと思います。淡い関わりながらも、植物に取り囲まれながらそれらの植物の一部に出会いつつ、という流れが私たちの生活において続いていくことが実際ではないかなと思います。ある瞬間で切れてしまうのではなく、植物に取り囲まれながら出会いつつという体験が連綿と続いていく、それが「私たちの生活」だと思えるわけです。

環境というのは、「取り囲む環境」と「対象物としての環境」の2種類があるとお話していました。もちろんすべて「環境」なのですが、環境に取り囲まれながら環境に出会い、人において行為や体験が起こりま

ある。」

機械的説明というのは、いわゆる関数関係だと考えます。たとえば、園芸療法を行ったから感情尺度が上がったとか、そういう一つの因果論として如何に仕立てていくか、それが機械的説明だろうと思います。

微分の話が書いてありましたが、時間の推移を独立変数として事象を微分すると変化が表れるため、生命の進化現象は機械的説明、つまり関数関係として落とせるのではないかという発想のもと科学的アプローチはこれまで行われてきたように思います。例えば、昨日から今日までの24時間（過去）と今日から明日までの24時間（未来）が同じだとは言わないまでも、関数関係として背後関係を表せる、というところから始まっているのではないかと思います。

私はあまりこのような発想に賛成ではありません。昨日から今日までの24時間と今日から明日までの24時間がどういう関係にあるかということは、なかなか人の知恵では表せないだろうと考えています。また、一瞬一瞬訪れる行為・体験を、事前の行為・体験からの機械的な説明、つまり関数で予測的に表すということではできないだろうと思います。「1年後のこの時間、あなたはどんな感情でいるでしょうか?」とか、「1年後のこの時間、あなたはどのようなことをしていますか?」といった問いかけは、そもそも今自分がどういう感情でいるのかも明確には分からないのに（今の自分の感情を説明すると、「この感情」からは離れてしまう）、今自分が何をしているのかさえも僕らは分からないのに（改めて振り返ったとしても、「その時」自分が何をしていたのかはつかめていない）、1年後のその状況を知るということはまず無理ではないかと思えます。

ご批判はあると承知していますけれども、少なくとも現在の水準の科学的アプローチで捉えることのできる人と植物との間に生まれる質感というのは、実際に生まれている質感と解離しているのではないかと思います。機械的な説明を現在の科学的アプローチと考えるとして、それではそこで起こっている行為・体験の質感というものを捉えることはできないように思っています。これは、投げかけです。

科学的という縛りについて

しかし、おそらく皆さんが質感を捉えようと研究を進める際には、いろんな方から「科学的方法じゃない」とか「これは科学的なのか?」といったことを突き付けられることがあると思います。科学的方法は守らないといけないという規範は強いと思います。

ひょっとして（先ほど長谷川先生の話されていた）社会構成主義などに通じるのかもしれませんが、——私はちょっと違うところにいると思っていますのですが

——「科学的」という規範自体を一度考えてみる必要があるのではないかと思います。

実証や証明に関する話を少しだけして、話を終えたいと思います。

（少なくとも心理学分野において）今科学的とされている方法の土台にある論理実証主義は、ウィーン学団が考えた検証主義を母胎としています。そのウィーン学団と行動主義／行動分析学の中心的存在であるスキナーとの相違点に関して、マルコム（ウィトゲンシュタインの高弟）が特に「証明」（実証と言い換えてもいいです）という概念を取り上げています。

「証明という概念は、一人称の心理的報告や表現の多くには適用されはしない。別の言い方をすれば、このような（一人称の）報告や表現は観察に基づいていないということである」

「第一に、ほとんどの一人称文はなんらかの観察によって作られたものではないこと、第二に、大部分それらは主体自身の証言以外の物理的出来事や状況にてらしてチェックすることによって「検証」されえないという意味で「自律的」であること」

（Malcolm, N. (1964/1980). 心理学の哲学としての行動主義. 村山正治（編訳）. 行動主義と現象学：現代心理学の対立する基盤（pp.205-237）. 岩崎学術出版社.）

論理実証主義というのは、大雑把に言えば、実証がなければその物事を理解したことにはならないということ。具体的に言うと、例えば私がここで「花では一番チューリップが好きです」と言ったとします。そうすると、「それはただのあなたの報告でしょう!? あなたが本当に好きかどうかそれは分からない」と言われてしまいます。それではどうするのかというと、例えば花を100種類そろえて、その花の匂いをそれぞれ嗅がせて、私がいちばん興奮したとか、血圧が上がったとか、呼吸が高まったとか、そうした手続きを経て証明してみせることで「この人は本当にチューリップが一番好きなんだ」と理解するわけです。

そういった手続きを経ないと理解したことにならないというのはナンセンスではないかと思えます。自分が「一番チューリップが好き」なことは、証明をしなくても分かっている話ではないかと思えます。（ただし、すでに述べました自分の今の体験を自分ではつかめないことと関連して、「一番チューリップが好き」と言うことと、チューリップを目の前にした時の幸福な感じとは、一旦分けて考える必要があります）

松本におけるアプローチ

私のアプローチの場合は、実証していくのではなくて、私が施設の入居者とず〜っと長い間付き合いながら、「（この人は）今確かにすごく喜んでいる」とか、「（この人は）今こういうことがしたいんじゃないか」

といったことを、かなりの実感を持ってつかんで、「それは確かなんだ」というように主張すること、つまりそのつかんだことの「確からしさ」を提示しているように考えています。習慣といいますか、当たり前前の習慣が当たり前のように分かっている、そういう関係のなかで「確かだ」と思えることを提示していく。そして、そういった当たり前のことを暗黙に了解している関係の中でつかんだ事柄を提示していかなければ、論理実証主義に巻き込まれてしまいます。三人称的な「彼はこう言った」と言った記述から「彼はこういうことがしたいんじゃないか」と推論する際には、彼と私には距離があるため、証明ということが問題になりますし、求められます。

例えば、私は既婚者ですが、「妻にはこういった面がある」と誰かに言ったとして、聞いた人は「ウソでしょう」とか「そういうことあるわけじゃない」とか言うかもしれません。けれども、私にとっては本当なんです。ずっと付き合っているなかで、(証明はしようがないけれど)「確かなんだ」としか言えないことはあるように思います。

おそらく、園芸療法の実験だと、クローズなシステムを一旦作って、それを皆さんが外から観察をする。比較的、そういう構造で動いているんだとは思いますが。けれども、いろいろな物事はオープンなシステムで動いているわけですから、オープンなシステムの中に自分も常にいて、その流れに乗って行く、そういうような立ち位置の認識の違いもあるのかなと思います。

おわりに

今まで話したことを簡単にまとめます。人と植物との間に生まれる質感とは、植物に取り囲まれながら出会いつつ生まれるものである。そして、質感を捉えるとは、その出会いが生まれる場に居合わせる中で記述し、描き出されることである。居合わせるためには付き合い続けなければならない。付き合い続けることにより、日常当たり前に行われる瞬間的な行為を当たり前前に了解するようになるだろう。このようなあり方は論理実証主義からの批判をはみ出してしまう。しかし、人と植物との間に生まれる質感はそのような(松本のような)アプローチでしか捉えられないのではないかと私は考えております。

以上です。ありがとうございました。

指定討論

長谷川：松本先生、どうもありがとうございました。このあと指定討論者として、会長の松尾先生からコメントなど、何でも率直なご感想などをいただけたらと思います。時間があれば、フロアとの質疑応答などもさせていただきたいと思っております。

松尾：どうもありがとうございました。普段考えることとは違った視点からお話をしていただきまして、私自身ちんぷんかんぷんのところもありますが、その中でひとつだけお尋ねいたします。対象を人に置き換えて、人と自分との関係というものを捉えるという捉え方は、動物行動学の中でやられた動物とともに行動しながら観察するという手法と非常に似ているように思ったのですが、いかがでしょうか。

松本：予想していなかった質問です。私は動物行動学に明るくありませんので、何と答えてよいのか分からないのですが(笑)。ある動物と一緒にと言いますか、その動物たちの中で彼らがどのように生活をしてどういう習性があるかということに著していく立場もあれば、むしろかなり実験的に行う立場もあるように思います。ただ、いずれの立場も対象として見えている面は含んでいますので、分け隔てるのは難しいかもしれません。そういう点では、できるだけ一緒にいながら彼/彼女らがどういうことをしてどういうことを思っているのかということに注目する私の研究とも分け隔てることが出来ず、類似していると言えるのかなあ…。

松尾：私、たまたまコンラート・ローレンツ(Konrad Lorenz)の本をいくつか読んだのですが、それらにはほとんどが一緒に生活をしながらどういうふうにも動物が行動しているのかを逐一書いてありました。それらの行動を通して、その動物の本質は何だろうというのを探ったということのようですね。そういう意味では動物を対象としか見ていないとはいえるかもしれません。しかし、観察する人を環境の一部として感じさせるようにしないと動物は本来の行動をしてくれないこととなります。人を対象にした場合でもその人の一部になっていかないとその人本来の考えとか行動とかいうのは出てこない。そういう意味では、アプローチの形としては非常に似ているように思います。

じゃあ、いったいどういうところが違ってくるのか。あるいは、観察者が人と植物の関係を学んでいくときにどういう点を注意すべきでしょうか。それと、園芸療法ではどのように関わっていけばよいとお考えでしょうか。

松本：そうですね…。人間ではない種の動物と仲間ではないけれども近い関係のなかで研究を行っていくことと、私が施設の中で高齢者の方と一緒に居ながら研究を行っていくことでは、明確には言えないのですが、似ているところと若干違うところがあるかもしれません。高齢者と私の関係と、ローレンツと動物の関係では違うところがあるのではないかと、ということ(根拠のない応答)ぐらいしか言えないのですが。

次に、園芸療法に関して、私はそれほど詳しくありませんので、むしろ私が聞きたいのですが、園芸療法というのは、園芸介入療法なのでしょうか、それとも

園芸療法なのでしょうか。いずれかで、大きく違うように思えるのですが。

松尾：おっしゃる通り、介在という方法と、介在ではなく一緒になってすすめる方法とがあると思います。どちらかという今までの園芸療法は、介在療法的な視点が強かったのではないかという気がしています。本当に一緒にやっているとおっしゃる方々は、記述なんて問題じゃなく、一緒にやっていくことが大切なんだというような言い方をされます。ただ、そういう方は、松本先生のように記述をしながら…というのはどうも苦手ようでして（笑）、そういう話題は学会には出てこないということになっているような気がいたします。

松本：その難しさはあるように思います。実践を続けることだけでも大変ですし、その実践を書くとともに大変になりますからね。「そういうことをしている暇がない」という話になると思います。

ただ、できるならやはり面白い実践があることを文として捉えないと、なかなか「園芸療法は面白い」と自信が持てないのではないのでしょうか。それから、書いて、人に知らせることは、学術的な活動として必要ではないかなと思います。

松尾：記述については、ああいう流れの中でこれからこういうふうな結論に行くのか、最後に教えていただきたいんですね。論文としてはそういうことを書かなければならない。だけど、そういうふうな実際が見えるようになる、というのが、関わっている人たちにとって非常に大切なことなんだというふうに見えらっしゃるのでしょうか？

松本：（誰にとってという問いには答えにくいのですが）私は、あまり知見を書かないという立場もあるように思います。エピソードに書かれたもの、それぞれのものにいろいろ含まれています。

私がいる心理学では、新しい概念とかモデルとかそういうものを出さなければいけないという規範が強いです。ですが、エピソードに含まれていることを個々の読み手が発掘することによって、「ああ、それはおもしろいな」とか、「この実践はいろいろ役に立つなあ」といったように感受するあり方もあるように思います。「これはこういう行為ですよ」と結論（概念・モデル）を与えてあげないと成り立たないように思っている方も多いのですが、むしろ最終的に知見を出さずに、そこで記述された豊かなものを味わうというあり方もあるのではないかと思います。

（記述を味わうなかで、自ずと大切なことが伝わるのではないかと考えています）

フロアからの質疑応答

長谷川：いろいろ議論は尽きないと思うんですけど

も、フロアからご質問などを。

質問1：東京農大の宮田と申します。レポートのことについてお聞きしたいのですが、記録者と言っているのかどうか分かりませんが、記録者としての資質というようなことについてですね、どのように取り扱ったらいいかお伺いしたいんですね。それから、相互作用でない部分でですね、記録から何を抽出して分析に出すのか。さっき、そのままでいいとおっしゃったんですが、その辺をよろしくお願いします。
松本：ご質問、ありがとうございます。記録者としての資質について私が一つ思うのは、さきほど言葉というのは字面ではないという話を、ポンと言ってしまいました。少し青臭いかもしれませんが、私は書かれたものから伝わるものにごく信頼しているところがあります。記録をする、記述をする場合には、「この人は、このことにすごくこだわっているな」とか、「このことがすごく好きなんだな」「すごく丁寧に考えているな」ということが読み手に伝わるか伝わらないかが大きな部分を占めるのではないかと考えています。資質という点では、上手下手という点では、私は決して記述がうまい方ではないですけど、私は高齢者と長く一緒に居ても、毎週居てもあまり飽きません。そういう点では、それは資質といえるのかもしれませんが。私の記述が多少ポジティブに読まれることがあれば、それは私が付き合っている方々のことを大事に思っていたり、そこで起こっていることを面白いと伝えようとする想いがあるかないか、というのが大きいのではないかと思います。やはり字面ではなくて、そこから何をその人が伝えんとするかというのが大きいのではないのでしょうか。

もう一つのご質問、相互作用ではなく、どういうことを知見として提出するのかというものでした。私の場合は、行為・体験ということで、＜今・ここ＞で起こっていることに注目していこう、そこを描き出していこうとしました。

（少し横道に逸れますが）以前所属していた研究室の後輩で「雰囲気」の研究をしている人がいました。例えば、「この雰囲気は？」と問われるとします。でも、皆さん考えてみたら分かると思いますが、雰囲気はどうやって捉えるのでしょうか。私も初めよく分からなかったのですが、彼女は「何となく気分が悪くなったり、楽しかったりするとは実際あって、雰囲気としか言えないものはあるでしょう」、「研究のテーマにして何が悪いのか？」とか言うわけです。どういうテーマで、どういうデータかという点に関しては、まあ、困難であっても興味を持ったのだからやってみようか…（笑）と思っています。私自身もそうですが、テーマやアプローチによっては、確かに手間がかかりますが、それは仕方のないことだと思っています。

質問2: 広島国際大学の吉長と申します。松本先生の研究方法について、質問というより感想を述べさせていただきます。

医学部在職のとき、私には二つの方向に将来進むべき道がありました。一つは研究者としての道です。もうひとつは患者さんを治したり癒したりする臨床医としての道です。両者について考える違いは-istという立場と-anという立場の違いです。例えば、scientistあるいはpsychologistという-istのつく職業は、その研究の結果を客観的なポジションで分析していく。しかし、physianは、医師として患者さんとその病気や家族、その患者さんの置かれた生活の中にどっぷり入り込んで、患者さんの病気を癒しを、あるいは健康を診ます。その意味で-anの患者さんの環境の中に自らも深く入って仕事をします。一方、-istは患者さんの環境の外にいて分析する。つまり、対象者との関係の違いが-istと-anの違いであると教えられました。

いま、園芸療法士が患者さんと園芸療法のプログラムをします。そのとき、患者さんと植物、それから患者さんと園芸療法士、植物と園芸療法士との関係を明確に認識しておかないといけないと思います。最初は患者さんと植物と園芸療法士の園芸療法プログラムです。それから、時間と共に植物が成長を続けていく。ここまでは園芸療法士は-anとして立場を保つ。しかし、最終的に、患者さんと園芸療法士が植物と一緒に育てたあとは、園芸療法士は3者の関係あるいは環境から外に出て行く必要があります。-istとしての立場です。つまり、達成目標が患者さんの自立であれば、患者さんと植物との関係性を、いわゆる-anから-istとして診ていくことが重要だと思います。この意味からすると、私がイメージする園芸療法士というのは、最初は-anという立場をとり、そして-istの立場をとる人です。最近、残念に思うことがあります。医師にしても理学療法士などいろんな「療法士」の付く人たち（…私も含めてですが）が、患者さんの目線に-anとして関係を保っていないような気がします。セラピストの「治してあげています」的な立場が身に付きすぎて、患者さんとの関係はぎくしゃくし、疑心暗鬼の関係が気になります。セラピーあるいは治していこうという目的に患者さんとセラピストが同舟してない。そこに

問題がある。

そういう意味で、今日の松本先生の科学的方法論は日常生活の中（臨床）の暗黙知を形式知にしていくような、いわゆる一人称で深く立ち会っての研究に感激しました。その関係をrelationshipなのかsynergyなのかというところに持っていくことはとても大事なことで、好感の持てる研究のスタンスだと私は感じています。**長谷川:** 何かまとめに近いご意見をいただいたみたいです。松本先生に一言いただいて、とりあえずこの場は終わりにしたいと思います。

松本: 私は施設に長く通っているわけですが、そこで介護士さんや看護師さんが私に「いいね」と言うことがあります。この言葉は、私が勝手にやっていることに対してだと理解しています。もちろん、職員さんの動きにも合わせながら、私はそこの中にいるわけです。それにしても、「散歩に行こう」と入居者に声をかけて勝手に行けますし（笑）、「～を買いに行こう」と入居者に声をかけてすぐに出ていきますし。そういった点で、例えば介護士さんはその場にいるわけですが、彼/彼女らは入居者と私との関係を支える、つまり私の研究を支えてくれていると感じたことがあります。（ここでの介護士さんは、吉長先生のイメージする-anから-istへと移行する園芸療法士と一致します。すーっと離れていきます）

先ほど、主観-客観の話をされたように思いましたが、先日ある臨床心理学の先生が私のようなアプローチに対して、「ちょっと転移分析を受けたほうがいい」と冗談交じりにおっしゃっていました。転移というのはセラピストが相手のことを思い過ぎると言いますか、患者とセラピストの関係を超えてしまうことを指します。

私のアプローチが転移か否かはともかく、私のやっていることは研究者だからこそ可能な試みかもしれません。私は、介護士さんや看護師さんと違うことを引け目に感じるのではなく、違うことはすごく大事だと思います。ただ、介護士さんや看護師さんで行っていることが違う点については、謙虚にならなければとは思います

長谷川: それでは、これで終わりにさせていただきます。